九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

近世大名による献上行為の儀礼化に関する研究

越坂，裕太

https://hdl.handle.net/2324/6787383

出版情報：Kyushu University, 2022, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

（様式３）

氏　　名　：越坂裕太

論 文 名　：近世大名による献上行為の儀礼化に関する研究

区　　分　：甲

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、日本近世武家社会において、諸大名が徳川将軍に対して実施した献上行為について検討するものである。将軍と大名の関係は、石高制の下で将軍からあてがわれた領知高に対して軍役を果たす主従関係を基礎に成立しており、それを維持するための日常的手段として、御礼、祝儀／不祝儀、機嫌伺などの名目の下での献上行為が間断なく実施されるようになったと考えられる。献上は、平和な時代における将軍への「奉公」として重視され、連綿と継続された。

先行研究では、全国各地の産物献上に関する蓄積が厚く、将軍権力の下に全国の産物が献上されたことの意義を国土領有権の象徴として論じる視角が定着している。しかし、産物献上はあくまで個別的な献上行為であったため、献上の時期や回数は大名によって異なり、一律でない。これに対し、殿中儀式と連動して全大名が一斉に実施した年頭・八朔の御礼献上、三季（端午・重陽・歳暮）の祝儀献上などは、惣献上と称され、大名統制の観点からはより重大な意義を持った。ところが、こうした質的差異は問われることなく、将軍への献上の全体構造の下での位置付けが不明瞭なままに産物献上だけが論じられてきた。一方の惣献上に関する研究は、初期政治史や儀礼、古文書学的関心の下で進められてきたが、両者は一体化することなく別個に論じられてきたといえる。このほか、刀剣の献上や鷹の献上、奥向における献上の具体像も示されるようになったが、これらの個別的事象を体系的に結びつけて把握する研究は見られず、近世大名による献上の基本的構造は依然として未解明の状態にある。

そこで、まず序章では、近世武家社会における献上の全体構造を提示するための手法として、献上が披露される空間の差異に基づき、表向・奥向の二系統の献上ルートを設定して分類する。表向・奥向は御殿構造の空間的区分を示すとともに、政治交渉の局面では機能的な差異としても立ちあらわれた。この視角から献上行為の分類作業を進めることで、表向の献上が体制的儀礼として全大名への実施が義務付けられたのに対し、奥向の献上が個別の主従関係や血縁による親疎を反映させながら大名と将軍の間に情誼的関係を醸成する機能を担ったことが浮き彫りとなる。

第１章から第６章では、序章で示した献上構造が定着する過程の解明を進めることとし、特徴的な事例を時系列に沿って位置付けていく。

第１章では、豊臣政権期の「取次」論の成果をふまえつつ、元和・寛永期（1615～44）にかけて絶えず献上を実施しようとした大名社会の動向を追うとともに、初期政治史における献上取次・披露の問題を通じて、老中・奏者番・側衆などの職制の確立過程を検討する。大名からの個別的な献上品については、奥向において将軍側近らによって披露され、将軍の嗜好に配慮した献上品が選択されたが、これは機嫌伺献上として定着した。第２章では、延宝期（1673～81）の対馬宗家が惣献上における献上格式を巡り「十万石以上格」という独自の石高表現を創出する事例を通じ、献上品とその数量が石高を指標とする献上規定を通じて序列化され、江戸城内における表向の体制的儀礼の中で大名家格の可視化に作用した経緯を検証する。一方、奥向において個別的に実施された献上に対する一律的な規制は緩やかだったが、享保７年（1722）に実施された献上改革の下では領内産物の献上を義務付ける方針が示されるなど、主従確認行為としての再編が図られ、国土支配を示す象徴儀礼へと昇華する。第３章では、この享保期（1716～36）の献上改革を儀礼化の画期として評価した。また、その前提として、元禄・宝永期（1688～1711）に肥大化した贈答の具体像を示すため、側用人柳沢吉保が５代将軍綱吉との親密な関係の下で実施した側向献上についてもあわせて検討した。第４章では、享保期の鷹狩再編過程において、将軍の用命を受けての「御用鷹」として巣鷹を献上した甲斐柳沢家に注目し、これを御用献上と位置付けて分析する。続く第５章では、宝暦期（1751～64）黒田家の右筆が作成した記録を用い、享保期以後に確立した献上の基本的構造を検討する。以上のように、享保期の献上改革を経て、従前の献上の多くが弾力性を失い固定的となったが、その一方で「不時」に献上を実施する大名の事例も多く確認できる。第６章では、長門萩毛利家における隼献上の通時的分析を通じ、将軍・大名間の情誼的関係を深める手段としては、依然として奥向における献上行為が重視され、将軍側近や奥向女中を通じて実施する内献上の手続きが発生し、盛行した歴史的経緯を論じる。

終章では、幕末・明治維新期に大名から将軍への献上が停止・縮小となった一方で、天皇への国産物「貢献」が制度化されていく過程の概略を示し、残された課題を述べる。

以上の構成を通じて、将軍権力の下で確立された献上儀礼の骨格を明らかにした。

なお、江戸時代を通じて連綿と継続された大名から将軍に対する献上行為をめぐっては、「献上儀礼」と称し、近世後期に見える確立された静態的な在り方をもって敷衍させる傾向が強かった。これに対し、儀礼化以前に立ち返ることで、将軍・大名の紐帯として機能した献上の本質的意義を見出したこと、さらに、儀礼化の過程の検証とあわせ、表向・奥向という献上の披露空間や担い手の差異に着目した体系化を試み、献上行為が幕藩制を維持するうえで重要な役割を有していたことを解明したことが本論文の成果である。